

アメリカにおける「フレンチ・セオリー」受容の知識社会学的検討

佐々木 基裕

1. はじめに

「フレンチ・セオリー」とは、日本語で言う「フランス現代思想」のことである。本稿が以降の記述において繰り返し依拠することになる Cusset (2003=2010) の著書『フレンチ・セオリー』の邦訳副題は、「アメリカにおけるフランス現代思想」と冠されている。これまで定訳のなかった「フランス現代思想」だが、「フレンチ・セオリー」はその訳語として次第に定着しつつある。確かに、「フレンチ・セオリー」の代表格として挙げられているフーコー、デリダ、ドゥルーズらは、日本における「フランス現代思想」のイメージと重なっており、フランス発祥の思想ないし理論が輸入されたという点において、日本の「フランス現代思想」とアメリカの「フレンチ・セオリー」には共通点も多い。

ただ、「フランス現代思想」＝「フレンチ・セオリー」として単純化することはできない。キュセによる同書原題の副題は「フーコー・デリダ・ドゥルーズ&カンパニーとアメリカにおける知的生活の変容」となっており、主役はあくまで「アメリカにおける知的生活」である。かつて Said (1983=1995) は「旅する理論」という論文において、思想や理論の移動様態について、始原、乗り越えられる距離、抵抗の条件、新たな用法や位置づけという4段階を提示した。キュセが描いた「フレンチ・セオリー」は、その後者2段階にあたる過程である。きわめてアメリカに特殊的な文脈のなかで受容された結果として、同書は読まれなければならない。したがって、日本の「フランス現代思想」との関連を考えるにあたっては、共通性よりはむしろ相違点を、大学や学問領域をめぐる状況の日米間の差異に着目する必要がある。

日本との比較という観点から見た時に最も注目し値するのは、「フレンチ・セオリー」は文学研究の領域で受容され、また文学的なフィルターを通して解釈された、つまり「文学化」したという見方である。日本における「現代思想」と言えば、特定の領域に拘泥しない学際性という側面や、制度としての既成のアカデミズムへの反抗という側面が強調される（仲正 2006; 佐々木 2009）。「ニュー・アカデミズム」という言葉に象徴されるように、日本の「フランス現代思想」は学会を中心とした正統なアカデミズムではなく、論壇・批評と呼ばれるアカデミック・ジャーナリズムの領域で受容されたという言説が支配的だと言って良いだろう。それとは対照的に、アメリカの「フレンチ・セオリー」の場合は純粋にアカデミズムの中の、それも文学という特定の領域を中心とした現象として語られる傾向にある。「フランス現代思想」と「フレンチ・セオリー」との関係捉えるにあたって、この文学化言説への詳細な検討は不可欠で

あると考えられる。

そこで本稿では、「フレンチ・セオリー」の文学化言説を整理した上で、その妥当性を検証することを目的とする。なぜ「フレンチ・セオリー」は大学のなかの問題として認識されるに至ったのか、そしてそのなかでもなぜ文学だったのか。こうした問題に、「フレンチ・セオリー」言説を資料とした整理と、引用分析を用いた定量的な観察によって応えていきたい。

構成は以下のとおりである。まず第2節では、キュセを中心とした言説を資料として、「フレンチ・セオリー」受容史がどのように語られているかを整理する。そのなかで、「フレンチ・セオリー」に関わるおよそほとんどの研究で参照されている一本の論文についての批判を通じて、本稿の目的に沿った課題を提示する。第3節では課題の1つ目として、なぜ純粋なアカデミズムの、大学内の問題として認識されるに至ったのかを、知識人論の観点から論じる。第4節では、アカデミズムの中でも特に文学という特定の領域で受容されたという言説を、フーコー・デリダ・ドゥルーズの引用論文数の学界間比較によって検証する。

2. 「フレンチ・セオリー」とは何か

本節では、先行研究を基としながら、アメリカにおける「フレンチ・セオリー」受容がどのように語られているかを整理する。そのなかで、大学内、そして文学研究内での受容という側面が強調されていることを示す。また、その証拠として頻繁に引用される Lamont (1987) による研究をとりあげ、その問題点を指摘する。

2.1 「フレンチ・セオリー」受容史

「フレンチ・セオリー」という言葉がキュセの著書によって定着する以前から、アメリカにおける構造主義・ポスト構造主義は文学研究におけるニュー・クリティシズムとの関連がしばしば指摘されてきた。ニュー・クリティシズムとは、ロシアン・フォルマリズムの影響を受け、イェール大学を中心として 1930 年代に誕生した形式的かつ内面的な批評およびその理論のことである。テキストの自律性を重要視するこの立場は、文献学と文学史というヨーロッパ的伝統からの離脱という志向を含み、「アメリカ的個性」を表現することが可能な領域として、アメリカ知識人の世界において、文芸批評をアカデミズムの中心的な地位へと上昇させることに成功したと評価されている (Cusset 2003=2010: 33)。「フレンチ・セオリー」が受容された背景として、このニュー・クリティシズムの退潮が指摘されている。Berman (1988=1993) や Lentricchia (1980=1993) ら文学研究史の専門家による研究がそうした指摘の代表例として挙げられるが、Eagleton (2008=2014) による著名な入門・解説書『文学とは何か』においても、ポスト構造主義の受容に際してニュー・クリティシズムへの説明に紙幅が割かれており、定説化していると感じて良いだろう。文学史的な説明は割愛するが、Frye (1957=1980) がテキスト偏重主義への批判を行ったことを契機として、1960 年代以降のニュー・クリティシズムは以前ほどの影響力を保てなくなっていた。その要因としては、公民権運動以降の政治的問題に対処できなかったテキスト内在主義という方法の問題、また教養としての文学に対する敬意の後退や反知性主義など、様々な指摘がある (Bloom 1987=1998; Hofstadter 1963=2003)。ただもっとも重要なのは、ニュー・クリティシズムの退潮は単に文学研究の一つの理論が衰退したというだけに留まらず、

アメリカの知的世界において文学研究が占めていたヘゲモニーを失うということを意味していたということである。Berman (1988=1993: 580) は、「文学批評が政治的に重要な役割を追求しようとすることは、アメリカの文学批評理論が包括的で、充分なものとするために必要な」基準であり、「構造主義、ポスト構造主義が取り上げられたのはこのような基準を念頭においてのことだった」という総括を行っている。映画研究、法律研究、神学研究などの他分野に対し、その自律性や自閉性を問い、その背景にある植民地主義や文化帝国主義を喝破することで、「フレンチ・セオリー」は文学に政治的・哲学的問題を導入してその領域を拡大させ、政治的・社会的な有用性の欠如という、ニュー・クリティシズム以降の文学研究が抱えていた弱点を克服させる機能を果たすことになる。「フレンチ・セオリーが文学部内部にあったコンプレックスを払拭し、ときにフレンチ・セオリーに熱狂することによって、文学部の地位をかつての人文学の頂点まで少しずつ押し上げる必要があった」のである (Cusset 2003=2010: 63)。

こうして危機に瀕していた文学研究の正統性を回復する手段として「フレンチ・セオリー」が活用されたわけだが、ではなぜそれが「フレンチ・セオリー」であって、他のものではなかったのか。これに対する回答として語られるのが、アメリカにおける「フレンチ・セオリー」受容の端緒となったと言われる、1966年にジョンズ・ホプキンス大学で行われた「批評の言語と人間の科学」と題されたシンポジウムの存在である⁽¹⁾。ロラン・バルト、ジャック・デリダ、ジャック・ラカン、ルネ・ジラルール、ジャン・イポリット、リュシアン・ゴールドマン、シャルル・モラゼ、ジョルジュ・プーレ、ツヴェタン・トドロフ、ジャン＝ピエール・ヴェルナンが招かれ、また参加が叶わなかったロマン・ヤコブソン、ジェラルール・ジュネット、ジル・ドゥルーズから送られた原稿あるいは手紙が聴衆に配布されたこのシンポジウムは、アメリカへの現代フランス思想の紹介という役割を果たした。フランスでは既に構造主義の大家として名声と地位を得ていた彼らが、アメリカという中立地帯で一堂に会し、そのことが彼らに普段は口にできないような学際的な発言を可能とさせた。Cusset (2003=2010: 15) が指摘した例を引いておこう。「ジョルジュ・プーレはバルトの構造主義分析に対抗して文学における想像力を擁護し、リュシアン・ゴールドマンはテキストの『社会化』という名のもとでデリダから距離をおいた」。また「ジャン・イポリットは講演のなかで、構造の『中心』を口にすることが妥当かどうかをデリダに尋ねた」。デリダはそれに応えて、『『中心構造』の内に現代的『断絶』もしくは『回路遮断』があることを確認』している。後にポスト構造主義と呼ばれるような革新的な議論が展開されていたわけだが、ポール・ド・マンら一部の例外を除いて、ここでの議論がすぐさま反響を呼んだわけではない。アメリカではレヴィ＝ストロースの『野生の思考』が同年に翻訳されたばかりという段階であり、『イェール・フレンチ・スタディーズ』の構造主義特集号もほとんど耳目を集めないという状況だった (Cusset 2003=2010: 14)。しかし意図せざる結果として、「より緩い定義を持っているため間口が広」くなるという効果をもたらした (Cusset 2003=2010: 17)、理論的に一枚岩とは言えない多様な論者の議論が「フレンチ・セオリー」というパッケージとして（もちろん当時はそのような命名はなされていなかったが）一括りに活用できる素地を作るという機能を果たした。デリダとラカンが初めて顔を合わせたのもこのシンポジウムの時だとされており、アメリカ文学研究に特殊的な文脈に沿った創造的誤読、つまり文学化を生じさせるにあたって格好の環境が用意されていた。

ニュー・クリティシズムの後釜として受容された「フレンチ・セオリー」というパッケージはその後、ポール・ド・マンやハロルド・ブルームらイェール学派によって積極的に解釈され、普及していった。ニュー・クリティシズムの中心地でもあったアメリカ現代語文学協会 (Modern Language Association) は、デリダ研究者であるヒリス・ミラーが会長を務めるなど、「脱構築主義」の揺籃地となる。中心的な派閥・学会に根付くことで、アメリカ文学研究における「フレンチ・セオリー」は確固たる正統性を確保することとなった。以上が、「フレンチ・セオリー」が文学化される過程に関する言説の概観である。

2.2 ソーカル事件への反応

「フレンチ・セオリー」が文学研究の威信を高めたことの証左が、1990年代半ばに生じたソーカル事件である。ソーカル事件とは、アラン・ソーカルという物理学者がポストモダンをでたらめに用いた疑似科学論文を『ソーシャル・テキスト』誌に投稿し、それが掲載されてしまったことをきっかけにして起こった一連の現象を指している。後に『「知」の欺瞞』(Sokal and Bricmont 1998=2012)としてまとめられたソーカルによるポストモダン批判は、文学研究のみならず、哲学、社会学、フェミニズム研究などあらゆる領域を巻き込み、科学における専門領域に関する論争を引き起こした⁽²⁾。キュセも序章を「ソーカル効果」と題し、「フレンチ・セオリー」を説き起こすにあたってソーカル事件を出発点としている。また、キュセの著書に対するFish (2008)の書評においても、ソーカル事件に対する評価は「フレンチ・セオリー」にとって、そして科学をめぐる重要な問題として記されている。「フレンチ・セオリー」への批判は、すなわちアメリカにおける科学への批判とも通じていたからこそ、文学研究のみに留まらない論争を引き起こすに至ったのである。

このことは、日本におけるソーカル事件への反応を念頭に置けば、やや奇妙に映る。日本でソーカル事件に反応したのは主にアカデミック・ジャーナリズムであり⁽³⁾、学会を中心とした純粋なアカデミズムにおいて日本の「フランス現代思想」の受容を批判する動きは当時も今も巻き起こってはいない。日本においては、ソーカル事件で批判されるような「フランス現代思想」の当事者とは、アカデミズムの「研究者」ではなく、ジャーナリスティックな「批評家」であるという意識が持たれていたのではないか。日本の状況については本稿の直接の検討対象から外れるため仮定でしかないが、その仮定のもとに話を進めるならば、上記のアメリカにおける事情について検討すべきは、いかに「フレンチ・セオリー」が文学研究を超えた影響を及ぼしていたかということよりも、なぜその影響がアカデミズム内部に留まり、専門領域(ディシプリン)の問題として語られているのかということである。この「フレンチ・セオリー」が大学の、専門領域の問題として認識されている点については、第3節で検討を行う。

2.3 ラモンによる研究への疑義

ここまで「フレンチ・セオリー」の受容史を整理してきたが、その根幹となっている文学化言説には、指摘しておかなければならない問題点がある。それは、文学研究者、文学史研究者にとつての「フレンチ・セオリー」言説を積み重ねたものに過ぎず、学界間の比較という観点から、またアカデミズムを相対化する視点からの検討が手薄なままに文学化言説が定説化しつ

つあることである。もちろん、文学研究者もその点には自覚的であって、キュセを始めとした「フレンチ・セオリー」研究において文学化の証拠として必ず参照される論文が存在する。それが、アメリカにおけるデリダの文学化を定量的な方法によって示した Lamont (1987) の研究である。ピエール・ブルデューやクリストフ・シャルルやフランス知識社会学の知見に依拠した実証的な研究であり、1960 年前後から 1984 年までのデリダの著作を収集し、哲学と文芸批評との学界間比較、そしてアメリカとフランスという国際比較を行っている。分析結果として、1975 年に転機が存在し、この年にアメリカでは文学の領域でデリダの著作が増加し、哲学の領域では減少し始めるのに対し、フランスではデリダに関する言及が減少し始めることを示している。

これが信用に値するデータであれば、確かにアメリカにおけるデリダの文学化の証拠としては十分である。しかし、データの収集方法において少なからぬ問題が存在する。第一に、年度によって参照されているデータ元が異なっており、それぞれのソースにおける収集方法に関する検討がなされていないことである。第二に、データはデリダの著作の数であって、デリダを利用した研究、つまりデリダを引用した論文ではないということである。アメリカにおけるデリダの文学化を検証するならば、調査すべきはデリダに影響を受け、デリダの概念ないし理論を援用した研究であろう。第三に、文学と哲学以外の領域における受容が検討されていないことである。その 2 領域で分析したために、偶然求めていた結果が得られたのではないかという疑義が残る。もちろん上記の問題点は研究時点において活用できたデータ上の制約に由来するものであり、1984 年時点での成果として、その意義が失われているわけではないが、引用索引データベースが充実してきた現代であれば、その制約はクリアすることができる。よって第 4 節では、単一のデータベースを用いて、多様な学界を対象を含めた、デリダを引用した論文の数量的な分析を行う。

そしてこれはラモンに責任があるわけではないが、ラモンが示した（とされる）デリダの文学化という結果が、後の「フレンチ・セオリー」研究においては「フレンチ・セオリー」の文学化の証拠として用いられているという問題点もある。デリダが特殊例だった可能性は、ラモンの研究に依拠する限り排除することはできないはずだ。そこで、デリダ以外の「フレンチ・セオリー」論者の分析も加えることで、その問題を解決する。具体的には、キュセの副題に示されている、フーコーとドゥルーズを加えた比較分析を行うこととする。

3. 見えない知識人

本節では、「フレンチ・セオリー」が学会を中心とした専門領域の問題として認識されるに至った経緯について論じる。前節で整理した「フレンチ・セオリー」言説を知識社会学的な観点から見るためには、ニュー・クリティシズムを中心的な理論としていた文学研究者という存在がアメリカの知的世界においていかなる性格を持つ集団であったのかを検討する必要がある。

「フレンチ・セオリー」が受容される 1960 年代以前のアメリカにおける文芸批評は、アカデミズムにおいては上述の通りにニュー・クリティシズムが中心であったが、ジャーナリズムにおいてはニューヨーク知識人による批評が中心であった。ニューヨーク知識人とは、「1930 年代後半から 1940 年代にかけてニューヨークで、いわゆる『トロツキー問題』を一つの中心問題

として広く社会主義の問題をめぐって考察を展開し、集合体を形成していた人々」である（矢澤 1996: 3）。政治的に見ればアメリカの大学における WASP 中心的な保守性に対抗したトロツキスト的な革新集団であり、そのことが彼らに知識人としての一定のまとまりを持たせていた。Jacoby (2000) が「大学や学会と関係を持たない非アカデミックな知識人」の最後をニューヨーク知識人に見ていたように、学会の内部に閉じこもらない彼らは、より広い大衆に向けて語りかけるがゆえに「公共知識人」と呼ばれている⁽⁴⁾。正確には、彼らはアカデミズムに閉じこもらなかったと言うよりは、人種的な制約を背景として、制度としてのアカデミズムから排除されていたと言う方が正しい。

堀 (2000: 45-53) がニューヨーク知識人関係者として列挙している 64 人のうち、54 人がユダヤ系である。また、ニューヨーク知識人の代表格である Bell (1980=1990) はニューヨーク知識社会を内在的に分析するにあたり、ユダヤ系か非ユダヤ系の「いとこ」たちという区別を行っている。ベルの定義においては、ユダヤ人であることはニューヨーク知識人であるための必要条件に近い。

堀 (2000) や Wald (1987) の研究によれば、彼らの多くは 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてアメリカに移民してきたユダヤ人の 2 世あるいは 3 世である。移民者には英語が満足に話せない者も多く、アメリカ社会に同化しきれず、その多くは低賃金長時間労働を強いられる工場のブルーカラー労働者であった。その上、アイビー・リーグに代表されるアメリカのトップ大学は WASP 支配階級に制限され、入学に際してユダヤ人枠が設けられるなど排他的な体制が敷かれていた。ユダヤ伝統のタルムード教育を受けた優秀な青年は、当時授業料が無償であったニューヨーク市立大学シティカレッジに集まることとなり、彼らが後にニューヨーク知識人の中心を形成することになった。

当時のアメリカの大学がユダヤ人に対して寛容でなかったことは、大学教員の採用についてはより顕著であった。ライオネル・トリリングがユダヤ人として初めてアメリカの大学でテニスを学んだのが 1939 年であり、ダニエル・ベルでさえ大学に就職したのは 1949 年（当時 40 歳）である。当時のユダヤ人学生にしてみれば、アメリカの大学に職を得てアカデミズムの中で生きていくという将来を描くのは困難なことであった。そうした彼らの事情が、売文業としてのジャーナリズムへ向かわせた側面は否定できない。『Partisan Review』（1934-2003）、『Commentary』（1945-）、『Dissent』（1954-）といった雑誌が創刊され、そこが彼らの言論発表の場として確立されていく。大学で育まれたはずの知的欲求が、大学の理不尽な慣習によって阻まれているという状況が、彼らにより一層の知識人としての反体制意識を涵養していった。

ニューヨーク知識人の影響力について、Kadushin (1972) が 1970 年に行ったエリート知識人についての調査を参照してみよう。20 以上のトップ・ジャーナル編集者への綿密なアンケート調査とインタビューによって、当時のエリート知識人を順位付けしたもので、1 位から 27 位までが公表された⁽⁵⁾。表 1 は、上位 20 位までの順位を示したものである。

チョムスキー、ガルブレイス、ウィルソン、マルクーゼ、モイニハンを除く 16 名がニューヨーク知識人であり、そのうち 13 名がユダヤ系である⁽⁶⁾。ソントグが 37 歳とやや若い、60 歳

1～10位	
Daniel Bell	Norman Mailer
Noam Chomsky	Robert Silvers
John Kenneth Galbraith	Susan Sontag
Irving Howe	Lionel Trilling
Dwight MacDonald	Edmund Wilson
Mary McCarthy	
11～20位	
Hannah Arendt	Herbert Marcuse
Saul Bellow	Daniel Patrick Moynihan
Paul Goodman	Norman Podhoretz
Richard Hofstadter	David Riesman
Irving Kristol	Arthur Schlesinger, Jr.

表1 最も権威ある現代アメリカ知識人（1970年）
※Kadushin（1972: 123）より筆者作成

を超えている者も多い。カデュシン自身、40・50年代に同様の調査を行っても結果はほとんど変わらなかっただろうと結論づけている。

1970年代以降になると、大学の大衆化を背景とした学生の消費者化などを背景として、「公共知識人」というものが成立し難くなっていく。これはアメリカに限られた現象ではなく、Jacoby（2000）がニューヨーク知識人を「最後の知識人」と呼び、Lyotard（1984=1988）がフランスの事情をさして「知識人の終焉」と叫び、竹内（2003）

が日本の事情をさして「教養主義の没落」と嘆いた事態は、すべて脱工業化社会における高等教育の大衆化に起因している。

このように典型的な知識人像のもとにニューヨーク知識人が語られるのに比べて、ニュー・クリティシズム研究者たちは、最初から大学あるいは学会に棲息し、社会との連関が希薄で、自分の専門領域における専門性にアイデンティティを帰属させる「見えない知識人（missing intellectuals）」と呼ぶのがふさわしいとJacoby（2000）は指摘している。堀（2000: 251）はニュー・クリティシズムに対して、「大学あるいは学会という限定された制度の中で繰り返され、批評理論の流行を次々と生み出し、それぞれの旗印のもとに学会内部で党派を形成し、覇権闘争を繰り返す」ものだという、手厳しい評価を下している。

以上の議論を踏まえれば、ニュー・クリティシズム研究者が抱えていたコンプレックスは、学問領域間の覇権闘争におけるものであると同時に、アカデミズムとジャーナリズムとの力学の中でのポジショニングという問題でもあったことがわかる。そのコンプレックスを払拭する手段として「フレンチ・セオリー」は活用されたが、彼らの「見えない知識人」という性格ゆえに、その議論はいわば「コップの中の嵐」となってしまった。これが、「フレンチ・セオリー」がアカデミズム内の現象として認識されていた理由の一つとして考えられる。こうした点はニューヨーク知識人に関する研究においてはしばしば指摘されてきたものの、「フレンチ・セオリー」研究においてはほとんど指摘されてこなかった。このこと自体が、「フレンチ・セオリー」言説が文学研究者にとつての経験であり語りであることを示している。知識社会学的に言えば、認識は存在に拘束されるものである。アメリカの大学における制度と知識世界の構造、そしてそのなかにおける「フレンチ・セオリー」受容者という存在が、そうした認識（「フレンチ・セオリー」言説）を生み出していた、と解釈できるだろう。

4. 文学化言説の妥当性

本節では、第2節の後半で記述した通り、Lamont（1987）によって提示された文学化言説の妥当性を論じる⁷⁾。デリダは果たして本当に文学化されたと言えるのか、そしてそれはデリダ

にかぎらず他の「フレンチ・セオリー」論者にとっても同様なのか。これを検討することが本節の目的である。

ソースとしたデータベースは、Web of Science Core Collection である⁽⁸⁾。ドキュメントタイプに関しては、論文のみを対象とし、レビューなどは除外した。また専門領域に関しては、Web of Science の分野を用いた。また検索語は、デリダであれば「Derrida J」とした。したがって例えば Jean Derrida という著者がいた場合、その著者の文献を引用している論文も引用論文数に含まれている。この点において完全なデータとは言えないが、そのことと専門領域とは独立なので、分析結果には影響しないと考えられる⁽⁹⁾。なお今回の分析手法は、Cronin and Meho (2009) による、情報科学分野における「フレンチ・セオリー」受容の引用分析を参考とした。対象としている論者や領域は異なるものの、手法と問題関心については同研究に多くを依拠している。

表 2～4 は、デリダ、フーコー、ドゥルーズについて、年代ごとに引用論文数が上位 10 位以内に入っていた分野の引用論文数を示したものである。

表 2 デリダの引用論文数

-1979	1980-9	1990-9	2000-9
Medicine General Internal	7 Literature	40 Philosophy	49 Literature
Literary Theory Criticism	6 Humanities Multidisciplinary	18 Literature	44 Philosophy
Cardiac Cardiovascular Systems	4 Philosophy	15 Humanities Multidisciplinary	20 Humanities Multidisciplinary
Literature	3 Law	11 Literary Theory Criticism	19 Literary Theory Criticism
Pharmacology Pharmacy	2 Language Linguistics	8 Religion	12 Religion
Social Science Interdisciplinary	1 Cardiac Cardiovascular Systems	8 Language Linguistics	10 Literature Romance
Philosophy	1 Medicine General Internal	7 Literature Romance	8 Cultural Studies
Literature Romance	1 Peripheral Vascular Disease	6 Law	8 Sociology
Literary Reviews	1 Literary Reviews	5 Geography	7 Literary Reviews
Education Educational Research	1 Literature Romance	4 Cultural Studies	7 Anthropology
Classics	1 Literary British Isles	4	
	Literary Theory Criticism	4	
	Cultural Studies	4	
	Art	4	

まず、デリダの分析結果を見てみよう。Literature ないしは Literary Theory Criticism はいずれの年代においても上位を占めている。ラモンの結果と同じく、デリダに関しては文学化されたという結果が出ていると読んでよいだろう。しかし、Philosophy については、ラモンとは異なる結果が出ている。1970 年代以前に哲学が文学を上回っていない。逆転現象が起きたという説は、今回の分析結果からは支持されない。またラモンが分析し得なかった 1990 年代以降に目を向けてみると、確かに文学は上位に位置しているが、哲学とほとんど差はない。特に 1990 年代に関して言えば、哲学のほうが上回っている。また、それ以外の分野では、1980 年代の法律研究、1990・2000 年代における宗教研究は一定数の引用論文数があり、文学・哲学以外の領域への広がりも確認できる。

したがってデリダの受容に関しては、1980 年代以前に文学化され、その傾向は 1990 年代以降にも継続しているが、同時に 1990 年代以降は哲学化もされており、また他分野への広がりも見せるようになっていったということになる。

次に、フーコーの分析結果を見てみよう。1970 年代までは引用論文がほとんどないが、1980 年代以降は文学が一貫して上位を占めており、哲学も同様である。1990 年代以降には歴史学が、2000 年代には社会学が上位に位置しているのも特徴として指摘できる。したがってフーコーに

表3 フーコーの引用論文数

-1979	1980-9	1990-9	2000-9
Philosophy	2 Metallurgy Metallurgical Engineering	24 Literature	29 Literature
Sociology	1 Materials Science Multidisciplinary	16 Materials Science Multidisciplinary	17 Philosophy
Psychology Applied	1 Literature	13 Philosophy	14 Sociology
Psychiatry	1 History	12 History	12 Humanities Multidisciplinary
Physics Multidisciplinary	1 Philosophy	8 Metallurgy Metallurgical Engineering	11 History
	Literary Reviews	7 Literary Theory Criticism	10 Social Sciences Interdisciplinary
	Humanities Multidisciplinary	7 Law	9 Political Science
	Sociology	5 Sociology	8 Materials Science Multidisciplinary
	Literature Romance	5 Humanities Multidisciplinary	8 Anthropology
	Physics Applied	4 Social Sciences Interdisciplinary	6 Metallurgy Metallurgical Engineering
	Literary Theory Criticism	4 Political Science	6
		Literary Reviews	6
		Language Linguistics	6
		Anthropology	6

表4 ドゥルーズの引用論文数

-1979	1980-9		1990-9		2000-9		
Literature	9	Literature	12	Literature	52	Literature	122
Literary Reviews	4	Literature Romance	9	Philosophy	31	Geography	92
Humanities Multidisciplinary	4	Humanities Multidisciplinary	8	Humanities Multidisciplinary	24	Humanities Multidisciplinary	87
Literary Theory Criticism	3	Literary Reviews	5	Cultural Studies	24	Philosophy	48
Literature Romance	2	Psychology Psychoanalysis	4	Literary Reviews	23	Environmental Studies	48
History	2	Philosophy	4	Anthropology	20	Anthropology	48
Sociology	1	Language Linguistics	3	Geography	18	Cultural Studies	47
Social Sciences Interdisciplinary	1	Art	3	Literature Romance	12	Sociology	42
Psychology Clinical	1	Psychology Clinical	2	Architecture	12	Literature Romance	31
Philosophy	1	History	2	Literature African Australian Canadian	11	Social Sciences Interdisciplinary	32
Literature American	1	Film Radio Television	2	Environmental Studies	11		
Language Linguistics	1	Cultural Studies	2				
Information Science Library Science	1						
Film Radio Television	1						
Art	1						

関しては、顕著に文学化したのは1990年代以降であり、その時期には広く社会科学全般において受容が進んだということになる。

最後に、ドゥルーズの分析結果を見てみよう。いずれの年代においても、文学が1位となっている。次点に位置している領域は年代によってばらつきがあるが、1990年代の哲学、そして2000年代の地理学に関しては、文学とは一定の差があるものの、無視できない数の引用論文が存在する。また1990年代におけるカルチュラル・スタディーズや、2000年代における環境学など、デリダやフーコーでは見られなかった分野が上位に位置しているのも特徴として指摘できる。したがってドゥルーズに関しては、3者の中で最も明瞭に文学化されている。それと同時に、デリダやフーコーとはやや異なった領域にも受容が拡散しているということになる。

以上の分析から指摘できることは、第一に、文学化という事態はデリダに限らず「フレンチ・セオリー」全体に当てはまるということである。第二に、ただし文学化と言う時に、それは決して文学において特権的に受容が行われていたわけではなく、主として哲学、そして論者によってさまざまな領域で受容が進んでおり、文学との差もそれほどはっきりとしたものではないということである。

この結果は、「フレンチ・セオリー」研究における文学化言説を否定するものではない。むしろ、最も盛んに受容されたのは間違いなく文学研究であり、そこにおける受容言説として見るならば、その説得力を補強する分析結果が得られたと言って良い。ただし、それ以外の領域に目を向けてみると、多様な領域で受容が進んでいたことも確かである。したがって、「○○化」言説が適用可能なのは決して文学研究に限られたものではないということも同時に指摘しておくなければならない。

5. おわりに

本稿では、「フレンチ・セオリー」研究を整理した上で、そこにおいて特徴的に見られる2つの言説、アカデミズム内の問題となったという言説と、文学化されたという言説に対して、知識社会学的方法からの検討を行った。得られた知見を改めてまとめておけば、アカデミズム内の問題となったという言説は、文学研究内の理論潮流の変化を指していると同時に、アメリカの知的世界における構造変容とも関連したものであることを明らかにした。また、文学化されたという言説に関しては、それは「フレンチ・セオリー」全体に関してある程度は妥当なものであるが、必ずしも文学研究においてのみ特権的に適用されるべきことではないということも明らかになった。したがって「フレンチ・セオリー」受容をより詳細に検討するためには、文学研究における文学化言説を相対化するにあたり、他分野における「フレンチ・セオリー」受容言説にあたる必要があるだろう。

最後に、残された課題を提示しておく。まずいま記したとおり、文学以外の領域における受容言説の検討を本稿では行っていない。第4節での分析を踏まえ、各学界における受容者の「意識」を検証する必要があるだろう。その際に、「フレンチ・セオリー」を通した各学界間の相互参照が行われていたかどうかは、「〇〇化」言説を相対化するにあたって重要な視点になると考えられる。また、ラモンが行っていたような国際比較も必要となるだろう。本稿ではしばしば日本の「フランス現代思想」との仮定的な対比を用いて議論を進めてきたが、それはあくまで仮定であって、実証的な分析が必要であることは言を俟たない。王（2011）によって中国における「現代思想」受容史が描かれるなど、「フランス現代思想」の受容はフランス・アメリカ・日本に限られた話ではない。さらなる分析が期待される。

注

- (1) ここでの記述は、同シンポジウムの記録である Macsey and Donato (1970) に依拠している。
- (2) Brown (2001=2010) では、サイエンス・ウォーズをめぐる論争の契機としてソーカル事件が主題として論じられている。ここではもはや、「フレンチ・セオリー」は文学研究のみに限定された問題を超えている。Lotringer and Cohen eds. (2001) には、「フレンチ・セオリー」当事者たちのソーカル事件に対する反応が収録されている。デリダやドゥルーズらはアメリカ的な文脈の特殊性に当惑を見せている。同書のタイトルは“French Theory in America”である。アメリカ的な文脈における「フレンチ・セオリー」という現象に対する反省的な視線が登場した契機としてのソーカル事件の重要性を示している。
- (3) 山形浩生と浅田彰との論戦と呼ぶには小規模なやりとりは存在した。浅田（1998）は「明晰にできることはできるだけ明晰にすること」と述べている。その他に、金森（2000）によってサイエンス・ウォーズの紹介がなされたものの、やはり日本の「フランス現代思想」に対する批判ではない。
- (4) Jacoby (2000: xvi) によれば、「公共知識人」(the public intellectual) という言葉の初出は Brinkley (1999) である。清水（2011: 19）は矢澤（1996）やマイケル・ブラウォイの「公共社会学」論と、「公共知識人」が集ったニューヨーク知識人との共通性を指摘している。
- (5) 1964年から68年にかけて、22誌のジャーナルに執筆した8000人以上の知識人リストを作

成し、その雑誌の編集者に「エリート知識人」を選択してもらうアンケートを実施している。またその編集者のうち数名に対して、その選択に際してのインタビューが行われた。

- (6) 堀 (2000) あるいは Wald (1987) によってニューヨーク知識人として言及されているかどうかを判断基準とした。
- (7) 引用論文数の検証によって明らかになるのは、「○○化」の必要条件は果たして実際に文学研究領域で満たされていたか、また他領域ではその条件は満たされていなかったのか、ということである。したがって本稿の末尾でも課題として指摘するように、文学以外の他領域で「○○化」が生じたかどうかというところまでは、本節の分析によっては明らかにすることが出来ない。
- (8) 同データベースには、Science Citation Index Expanded, Social Sciences Citation Index, Arts & Humanities Citation Index, Conference Proceedings Citation Index-Science, Conference Proceedings Citation Index-Social Science & Humanities の 5 つの引用索引データベースが含まれている。なお、SCI-EXPANDED と SSCI は 1900 年から、A&HCI は 1975 年から、CPCI-S と CPCI-SSH は 1990 年から現在までを収録対象としているため、年代ごとの論文数の増減に意味を見出すことはできない。ただ、本稿での分析は同年代における学界間の比較を目的とするため、問題はないと考えられる。
- (9) 専門領域と独立ではあるが、本分析では各学術領域における引用論文数が少ない場合が多いため、同姓同名の著者の混入には注意を払う必要がある。著者について精査したところ、人文・社会科学領域では問題は確認されなかったが、フーコーの分析結果 (表 3) における金属工学や物質科学などの理系分野は、同姓同名の別研究者であることが確認された。

参考文献

- 浅田彰, 1998, 「編集後記」, 『批評空間 第Ⅱ期』, 16: 298.
- Bell, Daniel, 1980, *Sociological Journeys*, London: Heinemann. (=1990, 正慶孝訳『二十世紀文化の散歩道』ダイヤモンド社).
- Berman, Art, 1988. *From the New Criticism to Deconstruction: the reception of structuralism and post-structuralism*, Urbana: University of Illinois Press. (=1993, 立崎秀和訳『ニュー・クリティシズムから脱構築へーアメリカにおける構造主義とポスト構造主義の受容』未来社)
- Bloom, Alan, 1987, *The Closing of The American Mind*, New York: Simon & Schuster Inc. (=1998, 菅野盾樹訳『アメリカン・マインドの終焉』みすず書房)
- Brinkley, Alan, 1999, "The Public Professor", *New Republic*, 221(13): 42.
- Brown, James R., 2001, *Who Rules in Science?: An Opinionated Guide to the Wars*, Cambridge: Harvard University Press. (=2010, 青木薫訳『なぜ科学を語ってすれ違うのかーソーカル事件を超えて』みすず書房)
- Cronin, Blaise and Lokman I. Meho, 2009, "Receiving the French: a bibliometric snapshot of the impact of 'French theory' on information science", *Journal of Information Science*, 35(4): 398-413.
- Cusset, François, 2003, *French Theory: Foucault, Derrida, Deleuze & cie et les mutations de la vie intellectuelle aux États-Unis*, Paris: Découverte. (=2010, 桑田光平・鈴木哲平・畠山達・本田貴

- 久訳『フレンチ・セオリー—アメリカにおけるフランス現代思想』NTT出版)
- Eagleton, Terry, 2008, *Literary Theory: An Introduction*, Chichester: Blackwell. (=2014, 大橋洋一訳『文学とは何か—現代批評理論への招待』, 上下巻, 岩波書店)
- Fish, Stanley, 2008, “French Theory in America”, *The New York Times*, April 6, 2008 (2015年8月31日取得, <http://fish.blogs.nytimes.com/2008/04/06/french-theory-in-america/>)
- Frye, Northrop, 1957, *Anatomy of Criticism: four essays*, Princeton: Princeton University Press. (=1980, 海老根宏・中村健二・出淵博・山内久明訳『批評の解剖』法政大学出版局)
- Hofstadter, Richard, 1963, *Anti-Intellectualism in American Life*, New York: Alfred A. Knopf Inc. (=2003, 田村哲夫訳『アメリカの反知性主義』みすず書房)
- 堀邦維, 2000, 『ニューヨーク知識人—ユダヤ的知性とアメリカ文化』彩流社.
- Jacoby, Russel, 2000, *The Last Intellectuals: American culture in the age of academe*, New York: Basic Books.
- Kadushin, Charles, 1972, “Who are the elite intellectuals?”, *The Public Interest*, 29: 109-125.
- 金森修, 2000, 『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版会.
- Lamont, Michele, 1987, “How to Become a Dominant French Philosopher: The Case of Jacques Derrida”, *The American Journal of Sociology*, 93(3): 584-622.
- Lentricchia, Frank, 1980, *After the New Criticism*, Chicago: University of Chicago Press. (=1993, 村山淳彦・福士久夫訳『ニュー・クリティシズム以後の批評理論』, 上下巻, 未来社)
- Lotringer, Sylvère and Sande Cohen eds., *French Theory in America*, New York: Routledge.
- Lyotard, Jean-François, 1984, *Tombeau de l'intellectuel et autres papiers*, Paris: Editions Galilée. (=1988, 原田佳彦・清水正訳『知識人の終焉』法政大学出版局)
- Macksey, Richard and Eugenio Donato, 1970, *The Languages of criticism and the sciences of man*, Baltimore: Johns Hopkins Press.
- 仲正昌樹, 2006, 『集中講義! 日本の現代思想』日本放送出版協会.
- 王前, 2011, 『中国が読んだ現代思想—サルトルからデリダ, シュミット, ローレンスまで』講談社.
- Said, Edward W., 1983, *The world, the text, and the critic*, Cambridge: Harvard University Press. (=1995, 山形和美訳『世界・テキスト・批評家』法政大学出版局)
- 佐々木敦, 2009, 『ニッポンの思想』講談社.
- 清水晋作, 2011, 『公共知識人ダニエル・ベル—新保守主義とアメリカ社会学』勁草書房.
- Sokal, Alan and Jean Bricmont, 1998, *Fashionable Nonsense: Postmodern intellectuals' abuse of science*, New York: Picador. (=2012, 田崎晴明・大野克嗣・堀茂樹訳『「知」の欺瞞—ポストモダン思想における科学の濫用』岩波書店)
- 竹内洋, 2003, 『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社.
- Wald, Alan M., 1987, *The New York Intellectuals: The rise and decline of the anti-stalinist left from the 1930s to the 1980s*, Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- 矢澤修次郎, 1996, 『アメリカ知識人の思想—ニューヨーク社会学者の群像』東京大学出版会.
(受稿 2015年9月1日、改稿 2015年11月4日、受理 2015年12月24日)

アメリカにおける「フレンチ・セオリー」受容の知識社会学的検討

佐々木 基裕

本稿の目的は、「フレンチ・セオリー」（デリダ・フーコー・ドゥルーズら）が文学研究においてどのように受容されたかを知識社会学的に検証することである。「フレンチ・セオリー」に関する先行研究に依拠しながら、なぜ「フレンチ・セオリー」が文学研究の問題として眼差され、文学化したと語られるのかを明らかにする。また、引用分析の手法を用いて、「フレンチ・セオリー」がどの学問領域で頻繁に引用されていたのかを定量的に検証する。

Sociological Study of “French Theory” in America

SASAKI Motohiro

This sociological study explores the extent to which “French Theory” (Derrida, Foucault, Deleuze, etc.) has left its mark of the scholarly literature on literary criticism. A document survey reveals why “French Theory” is considered superior from the perspective of literary studies and sifted through the literary filter. This study also reveals which disciplines have cited “French Theory” over recent decades by citation analysis.

キーワード： フレンチ・セオリー，知識社会学，引用分析

Keywords: French Theory, Sociology of Knowledge, Citation Analysis